

福山大学 大学教育センター 大学教育論叢
創刊号（2014 年度） 2015 年 3 月発行

大学教育センター・授業研究（FD 研修）の記録

大学教育センター・授業研究（FD 研修）の記録

大学教育センターでは、授業改革の一環として授業の可視化を目標の1つに掲げている。そのための手段として今年度より授業研究を実施することになった。明治以来の教育実践の中で、教員の指導力を向上させる手法として育まれ、“Lesson Study”の呼び名で、わが国の初等・中等教育の質の高さの秘訣としてむしろ海外で注目を集めたこともあって、わが国でも改めて脚光を浴び、海外でも積極的に取り入れられるようになったのが、教員同士が学び合う「授業研究」である。その手法は今や世界各地に広がり、レベルアップを目指して教員間の連携も進んでいる。授業研究では、教師が自らの授業を公開し、授業後に検討会で話し合う。初等・中等教育で実践されてきたこの手法は、高等教育の大衆化状況の下で、大学にとっても決して無縁のものではなく、本学の授業改善にとっておそらく有効に機能するのではないかと思われる。本手法の定着のためには、授業実践記録の蓄積が欠かせない。以下、その実践記録を掲げ、共通教育のみならず広く全学の授業改善に向けての参考に供したい。

平成26年度 第1回授業研究（第1回 FD 研修）

日時：平成26年7月4日（金）16:20～17:50

場所：大学会館3階CLIFT教室

授業科目：共通教育科目「キャリア・デザインII」

授業担当者：前田吉広助教

この授業の目的は、「日常生活の中に存在する様々な問題に気づき、それらの原因について考え、解決策を模索するプロセスを通じて、社会人基礎力の1つ“考える力”を鍛える」ことであった。とくに今学期は「学生生活を通じて感じる福山大学の課題を導き出し、その中から1つを選んで解決方法を提案・発表」することを具体的な課題として取り組んできており、当日の授業はこれまでの学生によるグループ討議を踏まえて、グループごとに検討結果を発表するというものであった。



授業はまず授業者により内容および課題の説明があり（約5分）、その後、7グループがそれぞれ設定したテーマについて、パワーポイントおよびそれに基づくハンドアウトを用いた発表（約5分）、質疑応答（約5分）を行うという形で進められた。各グループの発表テーマは以下のとおりである。

1. 学生のやる気を上げるには
2. イベントを増やしてほしい
3. 福大イメージアップ計画
4. 自動車実習を新しくしてほしい
5. 食堂の利用料金について
6. 授業が面白くない
7. コンビニの窮地を救え

当日は、事前に授業担当者から連絡がとられていたこともあって、松田文子学長、ならびにキャリア形成支援委員会委員長の布施守雄教授も参加され、大学教育センター関係の教員を中心に13名の参観者があり、授業者の求めに応じて、学生の発表に対する質問やコメントも適宜行うなど、単に授業観察を行うだけでなく、文字通り授業に参加することになった。各参加者には授業で学生に配布されたハンドアウトの他、本授業研究活動のために作成された後掲のルーブリック（評価指標）が配られ、それに各自の評定や意見を記入しつつ、観察を行った。授業後に行う分析・検討会については、時間の関係上、日を改めて実施することになった。



研究授業ルーブリック（評価指標）

日時： 年 月 日（ ） 時限

講義名： /受講者数：約 名

講義者氏名： 記入者氏名：

本日の授業について、下記の項目4、3、2、1の該当するものを○で囲んでください。但し、1ないし2に○をつけた場合については、改善提案を示して下さい。

観 点	評 定	
【教材研究】教材研究の深さ、斬新さ	4	教材研究が深く、独創性がある
	3	よく教材研究されている
	2	教材研究が浅い 提案（ ）
	1	教材研究ができていない 提案（ ）
【導入】授業開始時の導入方法	4	学生が授業の始まりと同時に授業に引きこまれている
	3	授業の始まりがよく考えられている
	2	授業の始まりに緊張感がない 提案（ ）

	1	チャイムと同時に授業が始まらない 提案（ ）
【展開】心地よい授業のリズムテンポ	4	授業のテンポがきわめて良い
	3	若干テンポが悪いところもあったがほぼ円滑に進んだ
	2	テンポ良く進まない場面が多かった 提案（ ）
	1	全体的にテンポが悪い 提案（ ）
【展開】発問・指示の明確さ・適切さ (全員が参加を保障する授業)	4	発問・指示が明確であり、学生全員授業に参加できていた
	3	若干のぶれはあったが、発問・指示が明確である
	2	発問・指示が不明確であり、授業に参加できていない学生が数名みられた 提案（ ）
	1	発問・指示がわかりにくく、全員参加の授業にはほど遠い 提案（ ）
【展開】学生への対応・応答	4	学生の意見・解答についての対応が見事である。また、集団の中での個別指導などが見事である
	3	やや不十分なところもあったが、対応や応答ができていた
	2	対応や応答が不十分であった 提案（ ）
	1	対応・応答ができなかった 提案（ ）
【展開】板書・資料提示・IT 器機の有効活用	4	板書・資料提示が計画されたものであり、見事である。また、IT 器機が有効に活用され、視覚的な情報でわかりやすい
	3	板書・資料提示の中に修正すべき点は見られるが、良くできている
	2	板書・資料提示が計画されているとはいえず、わかりにくいところがあった 提案（ ）
	1	板書・資料提示が全体的にわかりにくい 提案（ ）
【構成】授業の組み立て	4	導入からまとめまでが円滑で、優れた組み立てである
	3	改善すべき点は若干あるが、よい組み立てである
	2	改善すべき点が数点あり、よい組立とはいえない 提案（ ）
	1	組み立てが悪い 提案（ ）
【意欲・態度】学生の学習意欲	4	私語もなく学生が集中して学習に取り組んでいる
	3	学生の集中力が欠ける場面も見られたが、ほぼ意欲的学習態度である
	2	意欲的に取り組めていない学生が数名いた 提案（ ）
	1	学生が学習に集中できていない 提案（ ）
【理解】学習者の理解度	4	指導事項が、よく理解できているといえる
	3	理解できていない学生もみられたが、全体的にはよく理解できている

	2	指導内容が理解できていないところがややあった提案（ ）
	1	指導内容がほとんど理解できていない提案（ ）
【総合評価】	4	大変充実した良い授業である
	3	改善すべき点は若干あるが、良い授業といえる
	2	良い授業とはいえない提案（ ）
	1	良い授業にはほど遠い提案（ ）
【気づき・感想があれば記入してください】		
【本講義が評価者自身の講義の反省にとって有効であった点があれば記入してください】		

第1回授業研究の検討会まとめ（第2回 FD研修）

日時：平成26年7月18日（金）12:10～

場所：学生支援室（1号館322号室）

大学教育センターの授業研究第1回として7月4日（金）5限目に行われた「キャリア・デザインII」の授業の観察結果をめぐって、授業に関する分析・検討会を実施し、授業者と観察者の間で同授業内容に関する熱心な討議が行われた。この授業分析・検討会も、授業観察と同じく大学教育センターのFD活動の一環として実施されたものである。参加者から出された種々のコメントを再現するため、主な論点を挙げると、以下のようになる。なお、発言者の氏名は省略した。

観察者：今回は授業研究の第一回ということで、トップバッターとして積極的に名乗りを上げて頂き、授業を担当された先生にまず感謝したい。授業者の声は大きく、テキパキとした指導であり、感銘を受けた。私はわが大学の学生に、年上の人に対して話す力をつけさせたいと常々考えて来たが、今回の授業では、その点で学生の話し方には物足りなさを感じた。また、学生の発表内容がほぼいずれも「空想」の段階にとどまっているのを感じた。

観察者：授業者は教師としての経験はないが、これまでに会社の業務として社会で種々の催しを企画・運営した実績があり、他者を導く力があると思っていたが、今回の授業でもそのことを再認識した。学生が発言に詰まるのは、具体的なデータを持たないまま発言しているからであり、これをどう改善していくかが一番難しいと思われる。

観察者：授業者は初めて教壇に立ったということだが、実に堂々としていた。授業で取り上げたテーマが多すぎ、何回か分の内容が含まれていたように思う。そのために焦点が拡散したのではないか。中学校・高校の授業では、指導案作りをやかましく言う。つまり、授業の導入から展開への起承転結を明確にすることが必要であり、メリハリのある授業が求められる。この点に関して、授業の運びにもう一工夫が必要ではないかと思う。また、教師と学生との距離感に関して、年配教員に見られるように、距離感がありすぎるのも問題だが、「友達化する」というか、距離がなさ過ぎるのも問題である。やはり教師は学生との間に一定の距離を保つ必要があるのではないかと感じた。

観察者：授業者は「夢のある大学はいかにすれば実現するか」という点を基本において、学生を活動させており、そのための工夫をしていたわけであるが、自らのことを振り返ると、異なる科目の授業を担当している者として、担当科目の目標に向けて、いかなる内容で達成するかということで同じように悩み苦しんでいるのだということを感じた。他者の授業を見ることで、自らのことを振り返る良い機会になったように思う。

E. 今回の授業はアクティブ・ラーニングを取り入れたものであったが、学生の発表ばかりではなく、講義形式で行われる授業も当然あり、次回は是非とも講義形式の授業も見たいものである。

観察者：講義形式の授業と学生の発表を主体とした授業ということでは、今回の授業はたいへん新鮮であった。しかし、学生の発表ばかりではなく、講義形式で起承転結をはっきりした流れを意識することも必要である。とくに、キャリア・デザインというのが人生設計を含む目新しい用語であることを教える必要があるが、この授業の意味を理解している学生は多くなく、中には「デザイン」という言葉から美術関係の内容かと思っている者もいる。従って、体系的に講義した上で、グループ討議があったり、アクティブ・ラーニングがあったりすることが必要である。また、教師と学生の個別の遣り取りではなく、少人数グループでの討議（以下、SGD）で学生同士の議論を深めることも重要である。15回の授業の中で、講義と発表形式を組み合わせることでさらに効果の高い授業になることが期待できる。

観察者：起承転結の重要性が指摘されたが、本授業はすでにこれまでの授業で行われた SGD など踏まえた上での学生による発表であり、いわば起承転結の「結」の部分だったと思われるので、あの形式はあれで仕方がなかったのではないかと思う。しかし、ここに至る過程について説明がなされておれば、授業に対する見方や評価が変わったのではないか。1回の授業で完結するような講義の場合は、その中で起承転結が求められよう。

観察者：1つの授業は1学期15回を通じて起承転結をもつべきであり、その中の1回の授業にも起承転結が必要ではないかという意見が先ほどからでているのだろうと思われる。なお、授業のハンドアウトとして配られた、これまでの学生から出された種々の意見を1枚にまとめた資料には感心した。きわめて多くの多様な意見を取りまとめるのは大変な時間と労力を要したことであろう。しかし、このハンドアウトがただ配られただけであったのは残念であり、これから議論を展開するとか、その使い道が考えられても良かったのではなかろうか。

観察者：高く評価できる授業だったと思う。とくに学生の態度を育てることに重きを置いたものであり、完成度というよりも、まず取り組む態度を涵養するという点で、自らの授業を振り返って、学ぶところが大きかった。ただ、発表するからには、一定の水準に達していることが必要であり、例えば、パワーポイントの作り方にしても、各グループで、あるいは1つの発表の中でも記述に統一がまったく見られない点は、改善の余地がある。少なくともグループの中での話し合いを通じて、形式・表現方法を統一

することはあっても良かったのではないか。また、学生が選んだテーマにしても、ある者は自分の思いを述べ、ある者は他者への要求など、角度や視点があまりに分散していたことには違和感を覚えた。同じ「大学を良くするためには」というテーマでも、何か特定問題に焦点を絞り、解決策の模索まで進んだほうが良かったのではなかろうか。今回のやり方では学生は活発にはなるだろうが、解決に向かう流れができないように思われる。

観察者：授業のねらいがどこにあったかにも関わるが、学生のコミュニケーション力、プレゼンテーション力を高める、人前でも積極的に話せるようにするということがねらいであれば、内容については、少し目をつぶるということであっても仕方がないかも知れない。やはり、一度ですべてを成し遂げるのは難しいのであろう。

観察者：コミュニケーション力、プレゼンテーション力を付けたり、高めたりするということは、例えば今回の1つの授業だけで成し遂げうるものではない。また、数名の希望者だけを伸ばせば良いというものでもない。他の授業との関係、例えば、日本語表現の授業との関係、ひいては4年間の授業の中に位置づけて、初めて実現しうるものである。改めてキャリア・デザインという科目の位置づけを考えなくてはならない、一連の授業があって初めて可能になる、そういうことを考えさせられる授業であった。

観察者：学生の中になかなか積極的な2、3名が見られた。彼らの積極性を広くクラス全体に広げていくにはどうしたらよいかを考えないといけないのではないか。

観察者：今回の学生による発表の前に行われたSGDでは活発に意見を出し合っていたのだろうか。

授業者：当初、グループ分けは、気の合う者同士で集まるという方法をとったが、今回は、ランダムにグループを作るために、グループ分けに際して誕生日順に学生を並ばせて、異なる学年や学部の学生が混じるように配慮した。その中で、仲間ができたグループは議論が比較的活発に行われた。しかし、もともとコミュニケーションが苦手な者同士の集まったグループは、リーダーシップをとる者もいなくて、最後まで議論が進まないということが一部で起こった。SGDを3回行ったのだけれども、議論のなかなか進まないグループには、中に入って、少し意図的に働きかけを行った。

観察者：そうした場合に、積極的な学生に他の学生も巻き込むような指導をしておくことが大切なのではないか。一昨年、昨年の夏休みに、薬学部と生命工学と心理学科の学生による合同のSGDを行ったが、その際には予め1つのシナリオを提示しておいて、それについて、それぞれの立場で考えさせる方法を採用した。さまざまな学部の学生が初めて顔を合わせた訳であり、座を和ますために、最初の10分間くらいアイスブレイキングの手法を用いたが、そういう方法からも学ぶところがあるのではないか。今年の夏休みには経済学部も工学部も含めて全学でこの取り組みを行う企画があるので、参加されることを勧めたい。

観察者：今回のグループ編成の規模については、何か考えがあったのだろうか。

授業者：今までワークショップを催した経験などから、グループの規模としては5、6名が最適かということを感じていたので、今回も1グループを5、6名にするようにした。同じ授業を木曜日と金曜日にもっていて、それぞれ25名、40名のクラスであり、4チームと7チームに編成した。相対的に少人数の木曜日のクラスの方がより多くの意見交換が行えることが分かった。チーム数を揃えることが必要かというような思いをもった。

観察者：グループの規模を問題にしたのは、SGDを学生に任せるのか、あるいは指導を行うのかという点で、きめ細かく指導するには適正規模というものがあるような気がしたからである。

観察者：木曜日の授業も参観したが、その際に小規模クラスのほうが議論が活発に行われており、やは

りグループ数が少ない方が SGD の指導により多くの時間をかけられる、あるいは学生に接するということがあると思う。その意味では、教師の他に TA を付けることも効果的であろう。とくに同じテーマで議論する場合はよいが、複数のテーマで SGD を行うには、そうした配慮が必要になってくる。

観察者：昨年度の広島県の教員採用試験でもやはり SGD を受験者に行わせ、コミュニケーション能力を測る方法が採られた。課題を与えて、グループ内で参加者が司会その他の役割を決め、20 分で課題解決に向けて取り組ませるのであるが、リーダーシップを発揮する者がいるか、他のメンバーもそれぞれの役割を果たして SGD が円滑に進むか否か、といったことを審査員が逐一観察、採点するものである。このように、コミュニケーション能力の高さということは今後どの分野でも重要視されることになるだろうと予想される。

観察者：教員採用試験の例が出されたが、キャリア・デザインを考える際に、数年後には必ず就職試験を受けて社会に出て行くという基本的なことを学生に理解させることが必要であり、そうした採用試験の中では、SGD のような手法でコミュニケーション能力の有無を見ることが普遍的に行われるようになっていくという事実を知らせ、SGD や PDCA サイクルがいかなる意味を持つかを正確に理解させなければならない。採用試験のグループ討議のような場面では、企業側がテーマや時間は予め設定しており、メンバーがそれぞれの役割を踏まえて行動することを求められるが、当該活動の意味や流れを理解している場合には、比較的スムーズに進むものであり、まずそうした基本をしっかりと身につけさせることが重要である。

（文責：大塚 豊）

平成 26 年度 第 2 回授業研究（第 3 回 FD 研修）

日時：平成 26 年 10 月 24 日（金）14:40～16:20

場所：1 号館 1 階 LL 教室 2（01109）

科目：共通教育科目「英語発展Ⅱ」

授業担当者：米崎里准教授

この日の授業の目標は、①本文の内容を理解し、正しく音読することができる、②本文で使われている語彙や表現を定着する、③授業中の言語活動に取り組む、の 3 点である。

授業の展開は、はじめに、学生が各自で準備してきた英語の単語テスト（15 個）にとりくみ、各自で答え合わせをし、それを教師に提出する。学生は自分の興味のある単語を選び、事前に自分で単語テストを作成してくる。この日の授業ではたとえば



海洋生物の学生は、様々な魚の名前を選んだ学生もいるし、生命工学部の学生は化学英語の単語を選んだ学生もいた。

次に、文法クリニックと呼ばれる文法の解説である。毎週課題とされる e-learning の範囲に沿った文法に関するトピックが毎回2題出され、学生がその文法説明を行うことになっている。学生の説明が不十分な場合は教師が補足説明をする。



本文学習においては、進出単語の音読、本文のリスニング、音読練習という手順で授業が展開された。基本的にはパワーポイントを用いて授業が進められており、活動はペア活動が中心で協同学習の手法が取り入れられている。途中、iPadで本文のリスニングをオンライン上で聞き、各自音読の練習をする予定であったが、一斉にネット上にアクセスしたためか、不具合が生じ結局オンラインにアクセスができなかった。一斉アクセスのためiPadが機能しな

いこともあることは今後の課題となろう。

音読練習を行った後、学生二人に一台のICレコーダーが配布され、本文の音読をICレコーダーに録音させた。録音を終了した学生から、本文の表現の定着を狙いとした応用版の音読活動に取りかかった。覚えてもらいたい表現が（ ）で抜かれており、横に書かれた日本語を参考にして（ ）内に英語を入れながら音読していく。（ ）内に入れる英語がわからない場合はペアが教えることになっている。CDでもう一度シャドウイングを行い本文学習は終了した。最後に自己表現活動として、本日のターゲット・センテンスを用いて写真か漫画の描写を行う課題が出されたが、時間が来たので今週の宿題となった。



公開授業であることを事前に学生に連絡できなかったこともあって、突然の公開授業ではじめは学生も驚いていたようだが、大学教育センター関係の教員の和やかな雰囲気を感じ取ったか、学生はそれほど緊張した様子ではなかったように思う。

第2回授業研究検討会まとめ（第4回 FD 研修）

日時：平成26年10月29日（水）14:40～

場所：学生支援室（1号館322号室）

大学教育センターのFD活動に一環でもある授業研究第2回として10月24日（金）4限目に行われた「英語発展II」の授業の観察結果をめぐって、授業に関する分析・検討会が実施され、授業者と観察者の間で同授業内容に関する討議が行われた。冒頭に、授業担当者から授業の展開に関して、準備されていた指導案に沿った説明があり、その後、参加者が自由に意見を述べる形で進めた。今回は、授業観察者からの質問に授業者が答える形式で討議が進んだ。討議の様子を再現するため、主な論点を挙げると、以下ようになる。なお、発言者の氏名は省略した。

授業者：授業研究で授業を公開することの利点として、授業担当者が自らの授業を振り返ることができて、伸びることができる。また、学生のほうも伸びることができるのではないかと前々から思っていた。今学期の授業でも、1人の学生は前回、前々回の授業でペア学習ができなかったが、今回はできていたので、やればできるのだということが分かった。指導案を作っておいたが、分かり難いところもあったと思うので、簡単に説明しておきたい。最初の語彙テストに関して、前期はテキストの新出単語をテストしていたが、覚えてくれないので、今学期は自分の興味のある語彙を選ばせて、それをテストする方法をとった。受講生は生物工学部の学生なので、海洋の学生は魚の名前とか、化学関係の単語とかを取って来る者もあり、また、それが苦手な学生は前期で習った単語を挙げている。また、別のクラスの、例えば、経済学部学生には野球部の学生も多いので、野球関連の単語を取り上げている状況が見られる。従って、語彙テストの材料に学生自身が興味のある単語を選ばせる方法もまずまず成功しているのではないかと考えている。しかし、なかにはいい加減に取り組む学生もいるので、「これでは単位はだせない」と注意したり、それ以上に不真面目な学生には強制的に覚えるべき単語を指示したりしている。次に、「文法クリニック」というのは、eラーニングを利用して、例えば時制であれば、高校英語では余り習わない問題、あるいは間違いやすい問題をピックアップしてやらせるようにしているが、まだまだしっかり学習してこない学生もいて、ここは課題である。続く「本文」では、前期にイギリス英語を取り上げたので、後期はアメリカ英語の題材を使っている。以上が、簡単な授業の流れの説明である。

観察者：今の説明を聞くまで、単語テストの出題の範囲が不明で、前の週に次週の出題範囲を予告するのかと考えていたが、そうではないのか。

授業者：学生は事前に覚えたい単語を書いた紙を自分の学習用とテスト用に2枚作成し、それを使って、テストしている。つまり、学生自身がテスト問題を作成し、それに解答を記入する方法をとっている。自分で覚えていく単語を決め、それを授業中にテストすることで定着をはかるのである。強制的に覚えさせるのではなく、覚えたい、学習したいと自主的に選んだ単語なら容易に覚えるだろうという考えに基づいている。

観察者：自分で作成した問題に解答できないケースもあるのか。また、解答後に交換して点検するわけでもないのか。

授業者：綴りが間違っているという場合もある。学生同士で交換して点検することは行っていない。学

生が取り上げる単語のレベルが低すぎないか、綴りの間違いはないかなどの点検を行っている。

観察者：自分が出題した問題にどれほど答えられたかを自らモニタリングする意義はある。教員が一方的に覚えるように要求した単語は、覚えたくないと考える場合もあるので、良い試みではないか。これ続けることで、次第に身に付ける単語数も多くなることが期待できるように思われる。

観察者：1年間続ければ、500単語くらいは覚えられるであろう。学生はどのようにして、単語を集めてくるのだろう。英和、和英辞書などから取ってくるのだろうか。

授業者：大半がネット上から探してくるようであり、それ以外に、何人かの学生は、学部の専門科目として履修している「科学英語」などで学んだ単語も取り上げているようである。

観察者：海洋工学の学生などは、先般の大学祭でのプレゼンテーションでも英語の単語を書き込んでいるなど、関心をもつようになっており、その点でも自ら覚えたい単語をかんがえさせるのは良い方法であろう。

観察者：eラーニングで文法を学習しているということだが、学生は授業以外でどれほど利用しているのだろうか。また、時間的にはどれほどかかると思われるのだろうか。

授業者：学部によるように思われる。薬学部の学生はeラーニングを8割程度と、かなり利用しているが、点検したところ、他の学部では3分の1しか利用していないところもあるということが判明した。学習に必要な時間は個人差があるが、20～30分あればできるような分量、内容になっている。

観察者：eラーニングの具体的な活用法について、学生は学外でも利用することができるのか。

授業者：学外でもソフトのJAVAをパソコンに入れると利用可能なようだが、現状では主に学内のパソコンを利用して、学習している。

授業者：学生の利用状況をアクセスした記録で毎回点検するまでには至っていないが、「文法クリニック」は少しでも学生が興味をもちそうな問題を選んでネット上に載せるように心掛けている。

観察者：eラーニングもさることながら、今回の授業では、パワーポイント、ICレコーダー、iPadなどICT機器が多用されており、iPadのアクセスが難しかったという問題も起こったが、ICT機器の活用という点では、英語の授業に関して、さらにどのような利用可能性があるのか。

観察者：iPadについては、教材を載せて、教師が使っている内容を学生に同時に見せるか、あるいは学生同士が交換するということも可能であるが、この授業の中では、iPadがリスニング、本文の内容を聴くというために使われていた。うまく作動しなかったことはあったが、学生が個人のペースで聴けることは良いことであろう。事前に特定のURLに教材内容がアップしてあるのか。

授業者：比較的少人数のクラスではうまく作動したので、おそらく時間帯にもよるが、大人数で一斉に同一のURLにアクセスし、ダウンロードしようすると作動しないのではないかとと思われる。

観察者：アクセスがうまく行かなかった時に、学生の1人が「iPhoneのほうがいいなあ」と言っていたが、ネット上の情報にアクセスするという点では、学生がほとんど個人でもっている携帯を利用の方法があるのではないかと考えた。

観察者：大学のiPadなら利用料は大学の負担になるが、iPhoneを使えば、学生個人が受信料のような経費を負担することになるのか。

観察者：大学のWi-Fiを経由すればスマートフォンでもiPadでも同じだが、その場合でも一斉にアクセスすれば、うまく作動しないことは起こりうる。学生が個別にアクセスすれば、受信料の負担が生じる。

観察者：教室のアクセスポイントを増やすことで技術的には対処できる問題である。また、iPadにインストールすることで、問題解決できるソフトウェアがあるが、その価格がかなり高価である。それが可

能であれば、教員のもっている iPad から学生全員に配信することが可能で授業で使えることになる。iPad の効果的な使い方という点では、経費のことも含めて、技術的に未だ未だ改善すべきことがある。

観察者：iPad に事前に教材を入れておくのであれば、PDF ファイルくらいでないと難しい。今回のように特定のアドレスから学生にダウンロードさせるのであれば、授業時間以外の時に、授業の前に確認させるか、授業が終わった後の視聴を求めるということになるだろうか。

観察者：学生の席の並び方は、研究授業と普段とは変えてあるのか。

授業者：円を描くように座る授業が多いが、このクラスに関しては前を向くように配置してした。しかし、ホワイトボードを見るときには後ろ向きになってしまう。

観察者：グループの規模を問題にしたのは、SGD を学生に任せるのか、あるいは指導を行うのかという点で、きめ細かく指導するには適正規模というものがあるような気がしたからである。

観察者：木曜日の授業も参観したが、その際に小規模クラスのほうが議論が活発に行われており、やはりグループ数が少ない方が SGD の指導により多くの時間をかけられる、あるいは学生に接しうることがあると思う。その意味では、教師の他に TA を付けることも効果的であろう。とくに同じテーマで議論する場合はよいが、複数のテーマで SGD を行うには、そうした配慮が必要になってくる。

観察者：ホワイトボードは 3 面あるので、都合の良い方を見ればよい。この教室の構造は、学生がグループディスカッションをするのに便利ようにとの配慮で作られたものである。以前の LL 室のように、学生が全員整然と前を向いて座っている構造では、周囲の学生同士が討議する場合などに不便である点の改善を図ったものである。椅子も回転するので、好きな方向を向くことができる。

観察者：但し、整然と座るほうが収容力としては大きく、ランダムに座った場合、20 人程度ならよいが、多くなると使い勝手が悪くなるのではないか。

観察者：50 人を越えるようなクラスを同じ部屋で教えているが、補助椅子を入れるような規模でも、学生は好きな方向を向いて授業を受けることが可能になり、また、教員も自由に動ける点に、この教室の利点があって、そういう設計にしたものである。学生もこういう束縛のない形態を好むようである。

観察者：グループワークと一斉授業の両方を組み合わせて、それぞれの良さを取り入れて授業を展開すべきであって、全員に 1 つのことを話す時には、いずれかの面だけを向かせるようにする必要があるだろう。

観察者：この構造は、非常に熟練した教員にとって使い勝手のよいものであろう。学生がそれぞれ自分の世界に入り込んでいる時には、少しざわつくことも見られたが、それを避けるためには、教師の技量と授業のテンポが重要であろうし、今回の授業はほぼ 10 分刻みで次々の場面が展開し、学生がだらけることのないように配慮してあり、熟練を感じさせるものがあった。

授業者：確かに、授業が単調になると、学生はだらけることになり、10 分刻みでの展開くらいが適当と思われる。

観察者：自分の授業では、学生には問題を解くときに話し合いながら行うように指示しているが、この教室の構造は、学生がお互いに顔を見合って作業することができる良さがある。

観察者：高校の現場でも、会話に重点を置くところ、受験準備に重点を置くところなど、さまざまな英語の取り組みがなされていて、教える側もそれぞれ得手不得手があるといった状況が見られる。概して英会話は苦手な教師が受験英語の指導には強いという傾向がある。そういうさまざまな背景をもって入学してくる本学の学生も、英語力には相当な格差があるが、それをテンポ良く上手に指導されている点で感銘を受けた。指導案もしっかりと作成されている。ICT 機器もさまざまに利用されていた。先般も

広島県の高校校長会が国際バカロレアの研修会を実施するなど、ますます使える英語が求められるようになっており、この授業もそういう実用をねらったものになっているのか、レベルの差が大きい本学の学生を相手に一定レベルまで引き上げることの困難さなど、さまざまなことを考えさせられる授業であった。

授業者：授業の履修者のレベルには差があるので、ねらいとしては、少なくとも音読が間違いなくできるようになるまで指導したい。比較的レベルの高い学生にはシャドウイングで、日本語から英語に直せるまでにしたいと思っている。

観察者：英語の場合、学生はなかなか口を開かない。発音して間違っていたらと心配するからかもしれないが、それを何とか発音できるようにするには、集団で行ったり、個人個人に指名したりと、さまざまな方法を試みる。レベル差の大きい学生に対して、いったいどこに焦点を絞るのが難しい問題である。また、イギリス人が最も怒りやすいという内容が出た場合、その背景となる歴史や国民性などの解釈を加えることが、実用一辺倒ではない、大学の英語の授業らしくなるのではないか。

観察者：1人指名されても、なかなか発音できなかつたり、拒否反応を起こしたりする学生にとっては、ICレコーダーを使って発音を個別に練習させるという方法は効果的であろう。録音したものを他の学生に聞かせるということがあってもよい。また、周りでたくさんの学生が発音しているような場合、ICレコーダーは雑音を拾って、聞き取りにくくなるのではないか。

授業者：録音された発音をクラスで聞かせるというルールを作っておけば良かった。あるクラスの学生のもを別のクラスでモデルケースとして聞かせることは行ったことがある。また、雑音も入るが、ICレコーダーには比較的鮮明に発音が録音できている。

観察者：速いスピードで話される英語を理解するのは容易ではなかろう。文字で書かれたものを見ながらでもなかなか簡単ではない。

観察者：スピードの慣れるというのは容易ではないが、例えば、易しい英語の歌を取り上げて、歌詞を見ながら音を聞くということなどを3回くらい繰り返していくと、比較的良く分かるということもあるので、そうした方法も利用可能だろう。高校ではあまりそうした方法に慣れていないと思われる。

授業者：速さに慣れる必要もある。また、学生にとって興味関心のある教材や内容を提示するかが大切である。

観察者：前期にはアメリカ英語の教材を使い、後期はイギリス英語をということだが、何か理由があるのか。イギリス英語のほうが、単語1つ1つがはっきりと発音されて、聞き取り易いように思うが。

授業者：前期はアメリカのCNNの教材を使い、後期はイギリスのBBCの教材を使うことでバランスをとっている。

観察者：学生にペアで練習をさせる時、たまにほとんど口を動かしていない者もいたが、比較的話していた。しかし、今回の授業では教師と学生とのやりとりが少なかつたように思う。これはやはり1人を指名しても、うまく答えない、何度当てても答えが返ってこないなら意味がないということが関係しているのだろうか。

授業者：学生とのやりとりも可能だろうし、それも大切だろうが、おそらく指名しても話さないだろうという思いもあって、主に学生同士に練習させる方法をとった。

観察者：こういう授業を展開するには、クラス規模としてはどれくらいが適当なのだろうか。

授業者：この授業のように20人程度が適正規模だろう。50人ものクラスになると、1人1人の学生のケアができなくなり、どれほど理解できたか点検が難しくなる。

観察者：IC レコーダーに録音させて学生の発音などを後でチェックされるのか。

授業者：楽しんで聞いている。発音のできていない箇所などがよく分かる。新出単語は練習するので比較的よく読めているが、それ以外の単語で読めていないものがあつたりなどを把握できる。どのレベルになると出来なくなるかなど、学生から教えられることも少なくない。

観察者：評価指標の 1 つにある「学生の理解度」に関連して、英語の授業では何をねらいにすれば良いのか、言語スキルの習得と考えればよいのかといった点はどうか。言語系の教科の場合には、内容的に何を理解させるのかということが難しいように思われる。

授業者：卒業生の意見として、大学の英語の内容が簡単すぎたというのを聞いたことがあり、それほど難しくはないが、少し難しいといったレベルの内容を扱おうと考えた。新しい語彙も次々に覚えて欲しいし、ターゲット・センテンスなどを設定して、とにかく何かこれだけはこのものを決めて、それを全員が覚えて、使えるようになることをねらいにしている。

観察者：学ぶべき表現があつて、それをどのように身につけているかが大切であろう。

授業者：それと、あと 1 つは音読で、もちろん、音読ができていることと意味が分かっていることとは別物であろうが、まずは IC レコーダーを使って、正しく発音できているかが重要であろう。

観察者：授業の録画テープを見直して感じていたことだが、録画を見る方が現場にいるよりも冷静、客観的に見るができるように思う。おそらく録画は授業者にとって最も意味があり、自らの授業を振り返るよい材料になるということを再認識した。

（文責：大塚 豊）

平成 26 年度 第 3 回授業研究（第 5 回 FD 研修）

日時：平成 26 年 12 月 8 日（月）14:40～16:20

場所：1 号館 2 階 01210 教室

科目：人間文化学科「文化リテラシー入門」

授業担当者：竹盛浩二講師

「文化リテラシー入門」は、前期必修の日本語表現法から人間文化学科専門分野への橋渡しをする科目である。おもに「読む」活動を通して、専門分野の研究に必要な言語運用能力（資料の分析やコミュニケーション能力、表現力など）を身につけることを目指している。

テキストは、『日本語力をつける文章読本 知的探検の新書30冊』（東大出版会）を用いている。履修者9人全員が、その「3



0冊」の中から1冊を選び、その読みに関して順次発表を行ない、それをもとにして、全員で意見交換や議論を行なうもので、今回はその7人目の担当となる。

毎回の授業の目標としては、①多様な資料（文献・文章）と他者の考え方に触れる。②資料の内容を把握するとともに、論じられているテーマに対する自身の考え方や疑問点などを明確にできるような「読み方」を身につける。③意見交換や議論が円滑に行えるコミュニケーション能力の基礎を身につける、の3点である。

発表者が用意するのは、A3のシート1枚。「1. 要旨を見抜く」「2. 違和感を言葉にする」「3. 自分と対話する」「4. 「知らない」を知る」の4項目について記述した資料である。これをもとに発表する。

授業の展開は、はじめに、「読み」である。発表者は新書一冊を読んでいるのだが、授業で全員が読むのは、前出『日本語力をつける文章読本』に抜粋された部分の本文であり、まずこれを発表者以外の者が音読する。次に、いよいよ担当者の発表である。そしてその発表を受けて、全員が質疑に加わる。授業者は、発表シート1～4に沿った発表と討議を適宜進行させ、最後にまとめを行なう。

授業の最後には本時の質疑を振り返り、今日の授業（議論）を通して考えたことを「コメントシート」に記述して、提出させる。

授業展開上の留意点としては、まずは、「発表シート」において「要旨」を的確に捉えているかどうかである。この詰めが甘い場合、これを討議の中でどのように修正し、深めさせていくのか、この適切な



判断が授業者において必要となる。また、「違和感」と「自分」について、お互い積極的に交流させることを目指す。この積極性をいかに引き出すのか、「要旨」の把握を優先するあまりに活発な議論を停滞させてもならないところで、この調整が必要となる。そして何よりも、1人の発表に対して全員が質疑に加わることが課されている望ましい。さらには、授業展開の「まとめ」において、授業者はどこまでまとめるのか、「到達目標」を視野に入れながら

判断することとなる。

実際には、授業における議論は思うように活発であったとは言えず、内容が深まったと言えるものでもなかったのであるが、今回のような「主体的な共同の読み」の活動は尊重しつつ、これを一定レベルのところで積み重ねることとなる。最終15回には、様々なテーマのもとでの「読み」を振り返り、再確認して終わる必要はありそうである。

第3回授業研究検討会まとめ（第6回 FD研修）

日時：平成26年12月12日（金）12:10～

場所：学生支援室（1号館322号室）

観察者：学生は、主体的に発表しているのか、或いは、事前に先生が来週は君の番というような感じで、

順番を指定されてらっしゃいますか。

授業者：最初の資料に示しておいたように、この教材の目次を提示して、机の上に並べた 30 冊の新書の中から、興味ありそうなものを選ぶように指示しました。ですから、取り上げる各書物は、特定の学生 1 人に対応しているものです。

観察者：学生は全員選んだということですね。発表順番は教材の順に行っていくということですね。

授業者：いや、順番も学生に相談させました。その結果、資料の中に入れておいた、発表のローテーションが出来上がったということです。ですから、自分はこれが嫌いということとは言えない状態になっています。自分が選んだのですから。

観察者：最初の授業で、選んだということですね、予備知識なしに。

授業者：目次だけでは、どうにもわかりませんが、現物の新書が目の前にあるのですから、目次と見比べて選んだということです。この教材自体は、よくできています。新書的なものを読ませて、この事業は、教養から専門への橋渡しのような授業で、今年度スタートした科目のようですので、担当者 3 人で一応シラバスはできていたのですが、実際に何を教材に使うかということについては、前期、だいたい梅雨の頃から相談して、いろいろ材料持ち寄りながら決めたわけです。教材は 2012 年、東大出版会発行のものです。内容は、アンソロジー的なものになっています。1 冊の新書の中から、いいところをダイジェストしてきています。学生はその部分を読んでいるだけです。だが、発表者には、これを 1 冊貸し与えておりますから、通して読んでいるわけです。なかにはつまみ食いの読みの学生もいますが、今回の発表者は、全て読んでいました。当然、私の方も読んでおかないといけないわけで、学生に貸し与える前に、全体を通して読んでいたわけです。

観察者：私は、カリキュラムの中でのこの授業の位置付けに関心があります。他の 2 人の先生も同じ教材を使っていらっしゃるということですね。

授業者：3 人の授業者の展開はほぼ同じです。学生が何を選んだかというのは、違うと思います。しかし時々情報を交換するところでは、学生が要点を掴むというところでなかなかうまく行かないということのようです。共通に抱えている問題としては、授業その場でのやりくりの仕方にかかっているということです。ちょうどツアー会社が企画する、どこに行くのかよくわからない「ミステリーバス」のような感覚があります。しかし事業者はむしろそれを楽しむというところがあります。要は確実に読んで、違和感を言葉にしながら、自分自身を相対化しながら、自分の思いを述べる。その過程でいくつかの資料を収集し、また、討議の仕方を身につけさせていこうということです。専門へ繋ぐ橋渡しの役割です。

観察者：他の 2 つのクラスでも、たまたま同じものを選ぶということがあるのでしょうか。

授業者：そういうこともあると思います。

観察者：皆さんから提出された評価表をまとめてみると、「心地よいテンポ」という点で若干評価が低く、「学生の意欲」という点が高くなっています。学生の意欲が高いと観察されたのは何より大事だろうと思います。

観察者：学生の出席状況はどうでしょう。この間は、9 人中 5 人出席ということでしたが、これは必修の授業ですから出席しないと単位を満たせないことになりますか。

授業者：9 人のうちの 1 人は欠席が多いですが、残り 8 人はほぼ出席しています。前回はたまたま出席者が 5 人と少なかったのです。

観察者：私はこの授業を行うのは大変難しいだろうと思いました。文化リテラシーという授業のタイト

ルに我々が縛られるとすれば、この授業の狙いをどのあたり定めたらよいのか、ということを考えました。つまり、識字能力という意味でのリテラシー、あるいは文章の字面を読む力を養うのか、それとも、言葉の背後にあるいわゆる文化だとか思想だとかというものを読み取るところに授業の力点があるのかということです。作者の辛淑玉さんはテレビ等でもよく見かける在日韓国人の方だと思いますが、作者の経歴とか、そういうものをもう少し学生と共有することが、単に文章の字面でどういう意味かというのではなく、まさに文化リテラシーという授業のタイトルから言って必要ではないかという感じがしたのです。

授業者：そうですね。前期の全員必修の日本語表現法、これは言葉の力というレベルですよ。先程専門への橋渡しと申上げたことに関連したご指摘だろうと思いますが、ただ単に文書を要約して感想を述べ合うだけではなく、その内容に及んでいくということも加味していく必要があるだろうと思います。ただその前段としての文章の読みのところで、なかなかうまく行かない、しっかり組み立てられないという実態があるのです。そして議論を絶えずそれで行ってしまうということです。まずは文化リテラシーではなくて、読みのリテラシーが必要であろうと思います。もう 1 つ、とりわけこの素材は深く入り込むとすると、なかなか手強すぎると言えます。

観察者：発表者が背景をしっかりと調べてくるのならいいですが、そうでない場合、やはり授業者が、教師の側が関連の情報を提供することにより、学生のより深い理解につながるのではないかと思います。

観察者：学生は 2 年生ですか。1 年生ですか。

授業者：1 年生です。

観察者：学生が発言をしてくれない時、私ならどうするだろうと思いました。意見が出て来なくて、発言者があまりなくても、授業を最後まで展開されるのはさすがだと思いました。特に受講生が少ないので、議論を展開していくのは容易ではなかろうと思いました。

観察者：じっくり待って、学生の発言を引き出す等、ということですね。

観察者：先生は意見が出ない時、待つという手段を取られるのですか。私などすぐ自分で発言してしまいます。発言を引き出すために、ついついヒントを与えてしまう。そのあたりをどのように兼ね合いをつけたらよいのか。

授業者：基本的に待つという考え方です。

観察者：ぽつぽつと意見は出ていたのですが、後期の最初の頃も、あれくらいは意見が出ていたんですか。或いは訓練によって、あのレベルまで改善されたのでしょうか。

授業者：訓練の成果が見えるのは、最初に朗読をして、そして幾らか自分を語り出した 1 人の学生くらいです。ただ授業のルールとして、必ず 1 人 1 回は発言するということを決めていますから、その点は実現できています。ただし内容に関しては、満足度という点では、50%くらいでしょうか。質問もまさに単発的な質問にとどまっています。

観察者：ご参考になるかもしれませんが、この授業の位置付けですけれども、この名前を決める時にも関わっておりまして、人間文化学科では、これまで 1 年次前期に教養ゼミ、2 年次に基礎演習、3 年次、4 年次に文化演習が開講されていましたが、ちょうど 1 年次後期が空いていたので、それを繋ぐ意味で開設したのです。日本語表現法だけでなく教養ゼミからも繋げるという意味があります。3、4 年次には、ゼミでしょっちゅう学生と顔を合わせますが、1、2 年次には、担任の学生よりも基礎演習とかに出ている学生のほうがよく把握できるということがあり、授業の内容理解もさることながら、個々の学

生の性格とか考え方の理解という点でもこの授業は役立っているのだらうと思います。

観察者：授業以外の時間でも、内容について先生のところに質問に来たりする学生がいるのですか。どういうふうにまとめたらいいかとかの相談に来るとか。

授業者：それはないですね。前にも言いましたように、当日発表の資料を持ってきて、少し話したりはしますが、事前に学生と素材について、総合するということは、起こりにくいというのが、担当者 3 人の共通した見方です。

観察者：学生の小グループで話し合うというような方法は取れないのでしょうか。

観察者：私は学生主体で授業が進んでいた点はよかったと思います。先程もお話しが出ましたが、つつい学生意見が出るのを待てないで自分で話してしまい反省しています。学生にかなり中身が委ねられていますので、積極的な学生が出れば盛り上がり、そこでの学びが多い授業にもなりますし、消極的な学生が多い時には、得られるものが少ない。その間の調整をどのようにすればいいのか、どれくらいのバランスでやればいいのかということ考えました。

観察者：本学に入った学生が、4 年間の学びの中でも、いろいろな形の授業や仕掛けがあるということが好きなので、集団を中心とする私の授業のやり方があったり、今回のような授業があったりするのが良いのではないかと思います。グループで行う場合には、楽しくするのはどうすれば良いかということをもまず考えてしまいます。人数をもう少し増やすことができないかと考えました。人数が多ければ、最初の話しやすい者同士のグループを作り、その中で対話することに慣れてきたところで、グループの組み替えを行うことも可能だと思います。

観察者：この授業は教養ゼミの流れで作られているということですね。前期の教養ゼミで一緒だった学生が、後期には 3 クラスに分かれるということですね。

観察者：教養ゼミは顔合わせ的な要素もあって、2 クラスだったものが後期は 3 クラスに分かれるのです。教養ゼミの規模は学科によって差があります。人間文化学科では学生全員と教員全員が必ず 1 回は顔を合わせられるように組合せに配慮しています。

観察者：教養ゼミは各教員が 1 回だけ授業するという方法ではなく、多くの教員がある程度長期間接しないと本当の信頼関係は生まれません。

授業者：1 年次の前期開講の日本語表現法の方は、書く力を伸ばすことに重点が置かれています。先程来指摘されている文化リテラシーという授業の狙いはあるものの、実際には、ここでは読む力をつけるということにウエイトを置くものにすることを確認してスタートしたのです。

観察者：日本語表現法との関係もあると思いますが、言葉の力というよりも何を読むかという、材料のほうに少し重点を置いていくということだろうと思います。そういう意味では専門というよりも教養に近いかもしれません。

授業者：人間文化学科が言語・文学・歴史の分野から成っており、それに相応しい入門の材料を 3 つ用意するか。或いは広論理的な思考、哲学的な思考を鍛えるための材料にするかという検討も行いました。しかし、なかなか適切な教材が決まらず、最終的に現在の教材に落ち着いたのです。

観察者：各学生に新書を 1 冊ずつ読ませるとするのは素晴らしい。学生に発表させると、インターネットで調べて、それを発表するというのがありますから。

授業者：人間文化学部には、「日本語表現法 II」がありまして、これは書くことに力点を置くものになっています。その中では、学生の提出物はどこから引き写してきたと分かるものがあります。

観察者：授業の中で、先生の質問に対して学生がまったく沈黙するというのではなく、必ず何か答えていました。ですからある程度誘導すれば話してくれるということですね。

授業者：しかし、何を言い出すかわからないのです。

観察者：それでもまだマシでしょう。質問しても反応が全くない。「分かりません」と言ったきりの場合も多くありますので、少なくとも自分なりの考えを言うということは評価すべきだと思います。

観察者：全体として、やはり難しい授業だと思います。発表者が授業の少し前に資料提出し、その他の学生は本自体を全く読むことなく資料を見たとしても、これは付いて行くことは難しい。このやり方はどうかと疑問に思いました。例えば、授業の1週間前に資料を出させて、全員が読んでおくように指示しておかないと、その場で渡されても、私自身が読んで、この資料に書かれていることの意味がよく分からないのです。これでは議論になるわけがないと思ったのです。ただ実際問題としては、1週間前に提出するように要求しても無理ですね。

観察者：ただ授業前には資料を提出するのですから、流れを作っておけば、1週間前に出すことも不可能ではないでしょう。

授業者：しかも授業の開始時に当番や順番を決めているのですし、途中でも進ちょく状況について、尋ねていますから、もう少し早めに資料提出させることは、不可能ではないと思います。

観察者：発表者の作ってきた資料については直前でないと出ないわけですがけれども、新書のエッセンスを抜き出した部分は、学生全員に渡されるわけですから、みんな一緒に読めるのですね。

授業者：本文の一部を最初に音読させることは、たとえ事前に教材を読んできていない場合でも、ある程度の理解を持たせることを考えたものです。それから、この「悪あがきのすすめ」というタイトルですが、「悪あがき」という言葉自体が逆転の発想であり、どう読んでみても、「学問のすすめ」を書いた福沢諭吉を作者は意識しているのではないかと思います。「学問のすすめ」をもじって「悪あがきのすすめ」と来て、とくに「開かれた道理」という言葉が使われていますが、福沢もあの中で「天の道理」という言葉を「開かれた道理」として触れていますし、そういうふうに物事を相当に逆手にとっているようなところが窺えます。しかし、こういうことはダイジェストを読んだだけでは確認しがたいところがあるし、そこまでは学生に求められません。この文章のテーマはそうした逆転の発想でしょうが、教材にはさまざまなテーマが含まれていますし、それらを学生に理解させるのは、いかに「文化リテラシー」の授業といえども難しいところがあると思います。

観察者：日本文化リテラシーという意味では、「悪あがき」をしてはいけないというのが日本文化の良識でしょうが、それと違うものを示しているというのが一番大事なポイントだろうと思います。

観察者：「悪あがき」自体は悪い意味でしょうが、それをむしろパラドックス的に良い意味に使うというレトリックを使うのは、日本の作家でも結構使うやり方でしょう。最初に人を刺激しておいて、実は良い意味だったというような具合にです。

(文責：大塚 豊)